

説 教 『神の子である自覚』

聖 書 創世記1:27~28/ガラテヤの信徒への手紙3:13~14

「霊によって新たに生まれる(ヨハネ3:7~8)」とは、私たちが「神の子とされる(1:12~13)」ことである、という御言葉から新年が始まった。今日は「神の子とされる」ために何が起こったのか、を聞こう。

「キリストは、わたしたちのために呪いとなって、わたしたちを律法の呪いから贖い出してくださった(ガラテヤ3:13)」。「贖い出す」とはどんなイメージか。ローマ帝国内では戦争捕虜は奴隷にされたが、買い戻されれば自由が回復され、能力次第でローマの要職に就くこともできた。部族や出自にこだわるユダヤ社会や、階層が世襲される近世の国民国家よりも柔軟かつ合理的であった。パウロはこうした「奴隷の買い戻し」を念頭に、「律法の呪いから贖いだされた」と語ったのだらう。

「神は御自分にかたどって人を創造された。男と女に創造された(創世1:27)」。私たちは神に創造された神の子だ。そして多少偏りある神の子に成長した。

その偏った主体性から「律法の呪い(ガラテヤ3:13)」を作りあげ、自らその奴隷となっている。コンピュータに酷使されている人間のごとくに。「律法の呪い」をひと口で言うなら、物や人を奪い、戦争まで引き起こす仕組み。呪いはまた、外側の世だけでなく、内在化されて人々の心をも支配している。そしていつのまにか奴隷状態に馴染んでしまい、自由よりも「エジプトの肉鍋(出エジプト16:3)」を選んでいる。これは創造の自由に反する方向。だから「キリストは、わたしたちのために呪いとなった(ガラテヤ3:13)」のか。神の子が、神自らが、十字架の死というあまりに高額な代償をもって、滓のように溜まっていた奴隷債務を買い戻してくれた。

拙宅では度々、煙突から鳥が入り、火のないストーブ内できょときょとしている。窓を全開にし、ストーブの扉を開けても、自由な空間を目前に鳥はしばらく躊躇している。

「おいおい、寒いよ」と辛抱していると、鳥は決意し、チュンとかピーッとひと啼きして飛び出していく。そんな時、鳥が解き放たれた喜びと共に、充実を得たような奇妙な気持ちになる。

己自身の「贖われ」を予感するのか、鳥と交流している自然性が嬉しいのか。鳥が飛び立つ度に、その不可思議を味わっている。

「キリストは～呪いとなって～律法の呪いから贖い出してくださった(3:13)」。今や、牢の扉は開いている。十字架によって全ての者が贖い出されているのだ。鳥のひと啼きは祈りなのか、「アーメン」という応答なのか。私たちは「約束された“霊”を信仰によって受ける(3:14)」。信仰によって“霊”を受け、「アブラハムに与えられた祝福(3:14)」を知る。

「信仰によって生きる人々こそ、アブラハムの子であるとわきまえなさい(3:7)」。「アブラハムの子」とは、「神の子であるという自覚」と言い換えてもいいだろう。“霊”を受けた私たちは、各々神の子として、約束から現実へと再創造される。

「神は彼らを祝福して言われた。[産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ](創世1:28)]。無論「支配者として好きにしてよい」という意味ではない。信仰によって“霊”を受けた私たちは、「神の支配(国)」を受け継ぐ。ストーブに囚われた鳥を放つように、被造物と、世と、隣人と、己自身を「そのものたらしめる」。それが神の国の秩序。



#### 【おまけのひとこと】

創造の秩序に従って「そのものたらしめる」 縮こんだ世にあって さらに縮こむとしたら それは神の国の教会ではない 「神の子」は霊に吹かれ 世の拘束から解き放たれる 己の拘束からも